

例へば、がり妹許 | 妹處りの如し、又名詞に附くるもきれと同種なるべし。

相見者月毛不經爾戀云者乎曾呂登吾乎於毛保寒毳

(九)と 是指し定むる意の豆爾波にして、例へば「親と思ふ」家と定むの如し、其他左の數義あり。

(1)と共にの意、 人と語る、友と住むの如し。

(2)となりての如くの意、 雨と降る、花と散るの如し。

(3)とての意、

物思ふと過る月日もまらぬまにことしもけふにくれぬとかさく

暮ると明くと目離れぬものを梅の花いつのひとまにうつろいぬらむ

(4)同一動詞を重ね用ふるとき、其中間に入りて「また」の意をなすもの「見と見る」「聞きと聞く」「吹きと吹ぬる」「立ち

と立なむ爲とする「逢ひとし逢へば有りとし有る」「生きたし生ける」の類なり。

此豆爾波は動詞・形容詞・助動詞の終止法・命令法を名詞と見做して受くることあり。

春やとき花やおそきとき、わかん鶯だにもなかずも有かな

ともにこそ花をも見めとまつ人の來ぬものゆゑに惜き春かな

誰見よと花さけるらんまら雲のたつ野と早く成にしものを

このとと形は同じくして、別に漢字の與に當るとありて、文中に於て對等の語句を接續す。

夏と秋とゆきかふ空の通路はかたへすしき風やふくらん

流れ木と立まら浪とやくまほといづれかからきわたつみの底

(五)まで は其語原に「到り及ぶ」の意あるべしと考ふ、行き

至る意の豆爾波なり。

いつまでか野邊に心のあくかれん花しちらすは千世もへぬべし
我君は千代に入千代にさゝれ石のいははとなりてこけのむすまで

第二節 種々の語の下に附く豆爾波

(一)はは事物を引離して、他と區別する意の豆爾波なり、
例へば「天は高し」といへば、天地の天を地より引離し、これと區別していへるなれば、別に「地は廣し」といへる文ありて、これと對立せるものと心得べし。

人はいざ心は知らず古郷は花ぞむかしの香に匂ひける

秋はさね紅葉は宿にふりしきぬ道ふみ分けて問ふ人はなし

故にアストン氏はこれを Opposite (對格) と稱へたり。

ははたゞに名詞のみならず、複雑したる語句をもこれと同様に他と引分けて對立せしむ。

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

ぬるが中に見るをのみやは夢といはんはかなき世をも現とは見えず

かすくゝに我を忘れぬ物ならば山の霞をあはれとは見よ

歸り來ば重なる山の峯ごとにとまると心をまをりにはせん

はの語原はもの或はことなどなるべし、古くより漢字者を當つ、故に「茶をば飲む」行かずは「あらず」なども「茶といふものを飲む」行かずといふこととあらずと解して礙なし、なほ物は、こととはなど物事の重複したるは、これを省くとも、毫も原義を損せじと考ふ、如何にや。

新玉の年立かへる朝より待たる、(物)は鶯の聲

世の中をそむきにとては來しかどもなほ憂き事は大原の里

新文法家は、此はによりて新に總主といへる一格を定めたり、其說に云、草野氏日本文法三百七頁參照、象は體大なり、熊は力強しの象は、熊は、體大なり、力強しの一説話に對して、更に其主語たる性格を有す、この類の再度の主語を稱して、總主といふと、これ氏の創見にして、總主の名も亦當れり、蓋これはに一物を他より引離して區別する力あるが爲にして、即ち「力強し」といふ説話につきて、熊は然り、犬は然らずと相對比していふ意あるによるならん、故に特に一物を指し示す、且爾波なんも、亦はと同様に總主を示すことあり。

抄本の人麿なん歌のひとりなりける

父はなほひとにては、なん藤原なりける

(二)も 是同狀の事物の重複を示す、且爾波なり。

これやこのゆくもかへるもわかれつゝ、まゐるもしらぬも、逢阪の關

君が名も我名もたてど難波なるみつともいふな、あひさともいはじ

君ならで誰にか見せん、梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

また其一を擧げて、他をいはずることもあり。

明石かたゑしさをかけて見渡せば霞のうへもおきつ、白浪

さむしろに衣かたしきこよひもや戀しき人にあはてのみねん

このもとあれ(有)と重りてもあれとなり、その約まりてま

れとなることあり、例へば時しまれ(シモアレ)、見まれ(モアレ)

見ずまれ(ズモアレ)、とまれ(トモアレ)、かくまれ(カクモアレ)

の如し。

君といへばみまれ、みずまれふとのねのめづらしげなくもゆる、我戀

(三)ぞ は多くの中より一を指し定めていふ且爾波にして、其末を結ぶ活用言は連體法を用ふ。

あゆひ抄曰く凡そそは、それは、こそは、これそれをつゝめたるあゆひなり、是をもとゝして見るに、みな事物を一すちにさしきだめていふ詞なり、たとへば、石と玉とを人のもたるをまじへ置きながら、それぞ玉よと、をしふるなり、又玉をえりいだして、わが手にとりて、これこそ玉なれといふべし。

北へ行く雁ぞなくなるつれてこし數はたらでぞかへるべらなるのこりなくちるぞめでたき櫻花有て世の中はてのうければ

切るゝぞと稱し、語の終に置くぞあり、活用言には其連體法に連るを法とす

淺してふことをゆゝしみ山の井はほりしにこりに影は見えぬぞ

名にめでゝをれるばかりぞ女郎花われ落にきと人にかたるな

又疑ひ問ひかくるぞあり。

をみなべし草むらごにむれたつはたれまつ蟲の聲にまよふぞ

たれ聞けとなく雁がねぞわがやとの尾花が末を過がてにして

(四)なむ(なん) はぞと同じく、一を指していふ且爾波なり、

古くはなもといへり、この且爾波、文には多くして、歌には少し、其末は活用言の連體法を以て結ぶことぞと同じ、例へば「その人かたちよりはこゝろなんまさりたりける」

「住むところなん入間郡みよし野の里なりける」

いつはなもこひずあるとはあらねどもうたて此を戀のまげきも さくら花山に咲くなん里のにはまさとときくを見ぬがわびしき

(五)し も亦これと指し定めていふ意あり、あゆひ抄曰く

凡しといふ脚は、みな「あか」の心あり、云々其ものを正面に見ていふ心あり、脚となりても此心をえて、その方にして」といふ心をもちて見べし。

いつまでか野邊に心のわくがれん花をちらすばちよもへぬべし
秋の夜の月の光しあかければくらふの山もこえぬべらなり
今しはとわびにし物をさゝがにの衣にかゝりわれをたのむる
唐衣きつゝなれにしつましあればはるゝきぬる旅をしぞ思ふ
女郎花多かる野邊に今日しもあれうしろめだくも思ける哉

此しは名詞の外動詞・亘爾波等種々の語の下につく、
年ふればよはひはおいぬまかはあれど花をし見れば物思もなし
ほのゝくと明石のうらの朝霧に島がくれゆく船をまを思ふ
きくにだにこゝろはうつる花の色を見にゆく人はかへりまもせし
かくしこそ春の初はうれしけれつらきは秋の終りなりけり

何しかは人も来て見むいとゞしく物思ひまさる秋の山里
(六)こそは多くの中より一を擇び出す亘爾波にして、其末は活用言の已然法を以て結ぶを法とす。

春の夜のやみは文なし梅の花色こそ見えぬ香やは隠るゝ
打つれば袖こそにはほへ梅の花ありとやこゝに鶯のなく
又古く願望の意を表すこそあり、夢に見えこそ殊に告げこそ早く行きこそ遊びのみこそその類にして下に結びを要せず。

(七)だにすら事物の一端を擧げて、其餘を推し知らしむる意の亘爾波なり。

春がすみ何かくすらんさくら花ちるまをだにもみるべきものを
みな人は花のころもになりぬなりこけの袂よかはきだにせよ

たきの音をいかにきくらん都すら物わはれなるころにはあらずや
 君すらもまことの道に入ぬなりひとりやながきやみにまとはん
 (八) さへは添への轉なるべく、あるが上に尙添ひ加はる
 意の且爾波なり、あゆひ抄云ひとつの事に、ふたつみつも
 そひたるをいふ詞なり。

春雨にはほへる色もあかなくにかさへなつかし山ぶきの花

梓弓おして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜つみてむ

(九) のみばかりはたゞそれ一つにて、外なきをいふ且
 爾波なり、あゆひ抄云のみとはかり、二詞よく似てことの
 ほかにたがへり云々、のみは事の心をむねとしていふ、ば
 かりは物のさまをむねとしていふ、例へば白ききぬをの
 みきたりといふは、只いつも同じ色をきてあるか、又はあ

またの人のこといろもまじらずして、きたるよしをいふ
 詞にて、かた一さうなる心を見せたり、しろききぬばかり
 をきたりといふは、くれなる、みどりなどもあるを、それを
 みなきかさねずして、しろき分をきたりといふ心なり、此
 故にのみは其一すじをあらためぬ心あり、ばかりは其ひ
 とつにて、ふたつみつにおよばぬ心あり。

ひとりのみながひるよりはをみなへし我すむ宿に植てみましを
 わふ阪のゆふつげとりもわがごとく人やこひしきねのみなくらん
 名にめで、をれるばかりそをみなへし我おちにきと人にかたるな
 きえはて、やみぬばかりか年をへて君をおもひのまろしなければ
 今來むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出つるかな

(一〇) やかいつれも疑ふ意の且爾波にしてやの方は現
 在に就きて廣く問ふ意を示し、かの方は未來に限りて疑

ひ試むる意あるが如し、なほ後節掛結の條に詳説すべし、
あゆひ抄にはかを思ふか(人の子ををのこか女子かと思ふ類)やを問ふか(人に子はあるかなきかと問ふ類)と名づけたり。

名にし負はゞいさ言問はん都鳥吾思ふ人はありやなしやと

來や來やと待つ夕くれと今はとてかへる朝といづれをさされる

秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬか浪のよするか

明ぬるか川瀬の霧のたえくをちかた人の袖の見ゆるは

この二種の互爾波文の中にあるときは、其下を活用言の連體法にて結ぶ。

いつの間に紅葉しぬらん山櫻きのふか花の散るを惜みし

花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきに戀ひんとか見し

花の散ることやわびしき春霞立田の山の鶯の聲

年の内に春は來にけり一とせをこそとやいはんことしとやいはんや、かはいづれも疑の意より轉じて、反語となることあり。

聲たえず鳴けや鶯一年に再びとだに來べき春かは

諸共に鳴きて止めよきりくす秋の別は惜くやはあらぬ

今日來ずば明日は雪とぞ降なまし消えずはありとも花と見ましや

もみぢ葉も時雨もつらし稀に來て歸らん人をふりや止めぬ

かくてのみやむべきものかちはやぶるかものやしるの萬代を見ん

あゆひ抄曰くやははかはに似て、彼はおしなべたる理によりて靜に、これは目のあたりの勢によりて、表をおさふるを違へりとす、これがとやのたがひめなり。

や、か動詞形容詞助動詞を承くるとき、やは常に其終止法、

かは其連體法に續くを法とす。

おもひいぢやみのを山のひとつ松契りしことはいつも忘れず

ちる花もあはれと見すやいそのかみふりはつるまでをしむ心を
いきたるかまぬるかいかにおもほえず身より外なる玉くしげかな
哀ともうしともいはじかげろふのあるかなきかにけぬる身なれば
明ぬるか川瀬の霧のたえくくにをちかた人の袖の見ゆるは

されば来るや爲るや有るや善きやなど皆非なり。

又やかを動詞の已然法に續ぐ、一種の用法あり。

春來れば瀧の白糸いかなれや結べともなほあわに見ゆらん

まほたる、蟹の衣にことなれやうきたる波にぬるゝわが袖

山科の音羽の山の音にだに人の知るべく我こひめかも

たちはなの下ふく風のかぐはしきつくはの山をこひすあらめかも

此類多くはなれやたれやけれやぬれやめやらめやめか

もと續けりあゆひ抄には此等を伏やと稱せり。

又上に何誰等の疑の語ありて、其下になほ疑の豆爾波を

伏や

置く場合には常にかを用ふ。

小船さし和田の原からまるべせよいづれかあまの玉もかる浦

誰が爲めの錦なればか秋ぎりのさほの山べを立かくすらむ

但、前條の伏やに限り、疑の語の下に来る。

誰が爲に引てさらせる布なれやよをへて見れどとる人もなき

あれにけりあはれいくよの宿なれやすみけん人の音づれもせぬ

第三節 動詞の下に附く豆爾波

(一)ばは原因結果を表はす兩句の間を連ぐ豆爾波にし
て、活用言の已然法を受くれば既定の意を表はし、不定法
を受くれば未定の意を表はす。

(1)月見れば千々に物こそかなしけれ我身ひとりの秋にはあらねど
もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬ中ぞはるけかりける

どとも
どとも

(2) 立別れ因幡の山の峯に生ふる松とし聞かは今歸り來む

會はずして今宵明けなば春の日の長くや人をつらしと思はん

(二) とともども といつれも原因と其反對の結果とを表はす兩句を連接す、これ亦既定未定の兩種に分れ、ともは動詞の終止法、形容詞の副詞法に接して、未定の意をなし、ともは動詞形容詞の已然法に接して、既定の意をなす。

(1) 繪にかくと筆も及ばし乙女子が花のすがたを誰に見せまし

あらしのみふくめる宿に花すゞきはに出たりとかひやなからん

今日來ずば明日は雪とぞ降なまし消えずはありとも花と見ましや

(2) 終に行く道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

くらぬ山花をまつこそ久しけれ春の都に年はへしかど

人ふるす里をいとひてごしかどもならの都もうき名なりけり

に
なが

上述の接續法を誤りて、得とも爲とも來ともなどを、得るとも爲るとも來るともとするは非なり、又雖の意はと、とにありても、は添語なるを、其本を捨て、ものみを取り、悔ゆるも及ばずなど、重ねて誤ることあり、注意すべし。

(三) をが はいづれも活用言の連體法に接して、事の意外に出でたることを示めす。

有明の月は待たぬに出ぬれどなほ山深き郭公かな

雪とのみふるたにあるを櫻花如何に散れとか風の吹くらん

此種のがには古き例なけれど、後世には「行きたりしが會はれざりき」など其用例多し。

(四) は動詞助動詞の連用法に連りて、一事を終へて他に移る意を表はす、語原は處時トコロトキのとなるべし、又天つ風外

つ國などのつもこれと關係あるが如し。

春過ぎて夏來らし白妙の衣はすてふ天の香山

(五)で は動詞・助動詞の不定法に連りて打消の意を表はす、此且爾波は打消助動詞ずとしてとの約ずて更に約まりてなれるものなり。

中々にきえはきえなでうづみ火のいきてかひなき世にも有かな

(六)つゝ は半過去助動詞つゝの重なれるものにして雪は降りつゝは降りつ降りつの義なり。

第十章 感動詞

感動詞は喜怒哀樂等、人情の事物に觸れて發動するを表はす語にして、あ、あら、やの如く本來の嘆聲を寫すものと、

あはれ、いかになど他の品詞より轉來せるものとあり。

一 他語の上に置くもの

- (一) あ あゝ 嗚呼盛なる哉、あゝ尊としや
- (二) あら あら有難や
- (三) あな
- (四) あはれ
あな戀し行てや見まし津の國に今もありてふうらの初島
- (五) や やあ
あはれいかに草葉の露のこほるらん秋風たちぬ宮城野の原
- (六) やよ やよや待て、やよほとゝぎす
思ひ出る事もあらじと見えつれどやといふにこそ驚かれぬれ
- (七) いかに

都人いかにと問は、山高みはれぬ雲居にわぶとこたへよ
いざ

音にのみ聞てはやまじ淺くともいざくみて見ん山の井の水
人はいざ思ひ止むとも玉鬘影に見えつゝ忘らえぬかも

(九) いて

いで我を人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふ頃ぞ

(一〇) あはや

よゝをへておちくる瀧の白糸はぬける玉とはあはやみるらん

(一一) すはすは一大事なるぞ

二他語の中間又は下に置くもの

(一) や

來ぬ人をまつをの浦の夕なきに焼くやもしほの身もこがれつゝ

珍らしや昔ながらの山の井は沈める影ぞくちはてにける

世の人は蝶や花やといそく日も我心をば君ぞ知りける

君がすむ宿の稍を行くゝとかくるゝまでにかへりみしはや

白川の瀧のいとみを欲しけれどみだりに人はよせし物をや

感動詞のやは必しも活用言の終止法に續き又其下に來
る活用言を連體法とする要なし。

(二) も

我背子が來べき宵なりさゝがにの雲のふるまひかねてしるしも

吹まよふ野風を寒むみ秋萩のうつりも行くか人の心の

足引の山鳥の尾のまだり尾の長々し夜を獨りかも寐ん

玉の緒よ絶えなば絶えね長らへは忍ぶることのよわりもぞする

(三) は

聲絶えず鳴けや鶯一年に再とだに來べき春かは

諸共に鳴きて止めよきりくす秋の別はをしくやはあらぬ

いかなりしふしにか糸の亂れけん強てくれどもとけず見ゆるは

其他いかゞはせんは「いつらは秋の長してふ夜は」などあ

り。

(四)を

立とまり見てを渡らん紅葉ばは雨とふるとも水はまさらじ

露けくて我衣手はぬれぬとも打てを行かん秋萩の花

三他語の下に置くもの

(一)な

来て見べき人もあらじな我宿の梅の初花折つくしてむ

契りきなかたみに袖をぬらしつゝ末の松山浪こさじとは

花の香はうつりにけりないたづらに我身世にふる跳せしまに

(二)よ

夏草の茂みに生ふるまろこすげまろがまろねよくよへぬらん

忘れずよ又かはらずよ瓦屋の下たぐ煙下むせびつゝ

(三)か

かかもかな何れも活用言に添ふときはその連
體法に接す。

二葉より頼もしきかな春日山こたかき松の種ぞと思へば

水の面にまづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆるかな

吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりも行くか人の心の

今もかも咲き匂ふらんたち花のまじまのさきの山吹の花

(四)が

がかもがな何れも願望を表はす感動詞にして、
必ずしもしに續きてもがしがと用ひらるあゆひ抄には願

屬としたり。

がが
がな

かか
かな

よ

な

を

我宿の尾花が上の白露をけたずて玉にぬく物にもが

こゝろうし深き山にもいりにしがのどかにをりて浮世すぐさん

河原のゆづ岩村に草むさず常にもがもなとこをとめて

君がたけ惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

名にしおはゞ逢阪山のさねかづら人に知られでぐる由もがな

(五) なむ なむ これ等も亦願ひ詠ふる意の感動詞に

して、あゆひ抄に詠屬としたり、共に動詞の不定法に添ふ。

春風は花のなきまに吹き果てぬ咲なば思ひなくて見るべく

人知れぬ我通ひ路の關守はよひくごとに打ちもねななん

焼かずとも草はもえなん春日野をたゞ春の日にまかせたらなん

最後の例なるもえなんのなんは、半過去のなんにして、た

らなんのなんは願のなんなり、これ等は其接續法により

て區別すべし、即ち半過去のなんは連用法に接し、願のな

んは不定法に接す、但し下二段の如く連用と不定と其形
同じき時は、前後の文意によりて分たざるべからず。

(六) かし

眺むれば月傾きぬあはれ我此世のほどもかばりぞかし

さても君忘れけりかし鶯のなくをりのみや思ひ出づべき

大槻氏が感動詞の中に數へられたる紀の關守のいは、

此文典には且爾波の中に述べたり。

第十一章 熟語及疊語

第一節 熟語

熟語とは數語合して特別の意義をなすものをいふ、其中
に數種あり。

一、熟語名詞

- (一) 下の語主にして上の語従なるもの。
祝詞(宣り語)商人、小路、餉(乾飯)、曉(明時)、都(宮處)、汀(水際)、奴家子、
刃(燒刃)、黃昏、誰彼時、擒(生取)、牧(馬城)、前(眼邊)、後(尻邊)、古(往邊)、柳
(ヤの木)、腕(上手)、膠(煮皮)、焰(火穗)、一(昨年)、後年、興津白波、大納言、
甥(男人)、姪(女人)。
- (二) 上下の語何れも主となるもの。
山川、草木、露霜、善惡、勝負、心心、直直、位(座居)
- (三) 主従の區別なきもの。
朔月立、媒(中人)、丈長、請取
- (四) 句をなせるもの。
不可思議、未曾有

二、熟語動詞

羨(心病)、試(心見)、遠(遠離)、守(見伺)、慮(思計)、名(名告)、啄(突食)、重(重
み爲)。

三、熟語形容詞

うれたし(愁痛)、幼(長無)、逸(早し)、細(長し)。

四、熟語副詞

況言はんや、剩(餘りさへ)、濫(亂りに)、今更、所謂(云はるゝ)、有謂
(有らるゝ)、必(かならず)、自(己づから)、須(爲べからく)。

五、熟語接續詞

或(有謂)、抑(其もく)、就中、加之、而(のみならず)。

疊語

第二節 疊語

同語を重用するものを稱して疊語といふ。

一、名詞の疊語

(一) 多數の意を表はすもの。

津々、浦々、様々、品々、人々、家々。

(二) 轉じて副詞となるもの。

山々、度々、月々、年々、時々、所々、口々に、折々。

二、動詞の疊語

動詞の疊語はすべて副詞となる。

ますく(増々)、ありく(有々)、行くく、返すく、絶えく。

但、神議カガヒに議カガヒる「神集ツギヒに集ツギヒふ煙立龍タチリウの如き一種の疊語は副

名詞の疊語

動詞の疊語

詞とならず、たゞ其動詞の意義を深むるのみ。

又知らずく「見れどもく」の如く動詞句の疊語もあり。

三、形容詞の疊語

重々し、長々し、軽々し。

又花々し、物々し、雄々しの如く名詞の疊語より形容詞と

なり、馴々し、晴々しの如く動詞の疊語より形容詞となれ

るもあり。

四、副詞の疊語

げにく、いとく、なほくの如き疊語は、皆其意義を深

くす、又本來よりの疊語副詞もあり、なかく、かつく、い

よく(いよ)の類なり。

忘れぬる君はなかくつらからで今まで生ける身をぞ恨むる

副詞の疊語

形容詞の疊語

君がへん八百萬世を數ふればかつ今日ぞ七日なりける
みまさかや久米のさら山さらくに我名は立てし萬代まで
老ぬればさらぬ別もありといへばいよみまくほしき君かな

第十一章 接頭語 接尾語

接頭語

接頭語は他の語の頭に添ひて熟語となり、これに一定の意義を加ふるものをいふ、此等とは別箇の品詞なれども、既に其意義の一部若しくは全部を失ひて、獨立に使用せられざるものなり、例へば初春・小川・搔鳴す・搔曇る・彌増の類は尙其原義を存すれど、左の諸語の如きは全く其語原を失へり。

いろ母、いろ兄、いろ弟、いろ姉、
いちちろし、いちはやぶ。

ま 眞魚、眞心、眞中、誠(眞事)。

い 石上(い其上)、い隠る、い歸る、い懸る、い添ふ。

い 切る、及、延、泊、盡、い取る、い争ふ。

み 峯(み根)、み門、み阪、命(み語)、三吉野。

た た遠み(玉銚の道をた遠み)、た忘れ(ぬば玉の其夜の

夢をた忘れて)、易(た安し)、棚引(た靡く)。

を を長谷、を田卷、を山田。

か か易し、か黒し、か青し。

接尾語も亦接頭語と同じく、單獨に使用せらるゝことな
く、他の語の尾に添ひて、これに諸種の意義を加ふるもの
なり。

接尾語の中にも、其語原尙明かなるものと、全く不明なる

ものとあり。

一、名詞の複数を造るもの

など 語原は何となるべし。月花など、歌など。

ども 女ども、子ども、事ども。

どち たち 此兩語もとは同語なるべけれど、後に至り

てたちは單に多數の意のみを示し、どちは同類同種の意

を含むに至れり、和訓栞云たちはどちの轉訛、萬葉集にと

ちは共字たちは等の字を讀めり。

公たち、親たち、親たち、子たち、

友どち、思ひとち、敵どち、おないどち(同年)

ばら 奴ばら、殿ばら、法師ばら、

このばらは、下部物部忌部等のべに、次條のらの添ひて

なれるものなるべし。

ら 君等、僕等、是等、其等、子等。

二、名詞を造る接尾語

ら 希ら、宵ら、夜ら、幾ら

うば玉のやみのうつはさだかなるゆめにいくらもまならざりけり

此らは語末の助辭にして、殆ど何等の意義なし、又動詞形

容詞にも添ひて、戀しら、佗しら、思ひらなど古く用ひらる、

一人二人のり、晝夜のるも亦此類の接尾語なるべし。

け 朝け、夕け、霜け、雪け。

げ 人げ、心ありげ、悪げ、嬉しげ、惜しげ。

折取らば惜げにもあるか櫻花いざ宿かりて散までは見む

さ 遠さ、善さ、會ふさ、行くさ、歸るさ、出づさ、

入るさ、

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば

み 大槻氏はこれを接尾語に數へられたり、予は前章にも述べたるが如く、此みを以て活用言の凡てに通ぜし名詞法なりと考ふ。

形容詞 高み、青み、重み、輕み、安み、甘み、(重んじて安んじて)

疾み(急事) 無み。

里遠みより雁ぞなきけるせんすべなみに庭に出で、珍ら

しみにや人の折るらん

動詞 老見、幼見、咲見、慍見、

助動詞 可美、不み、(神無月降りみ降らずみ)

此み形の名詞法更に活用することあり。

淺し 形容詞 asu-si

淺み 名詞法 asu-mi

淺まし 形容詞 si

淺む 動詞 驚き淺む、あきみ興ず

asu-mu

淺むく 動詞(欺く) asu-mu-ku

此他

まづむ(沈) sidu-mu (のぞむ) nozo-mu

まづく(沈) sidu-ku (のぞく) nozo-ku

まのふ忍 sino-bu ひろむ(廣) hiro-mu

まのふ(凌) sino-gu ひろく(廣) hiro-gu

かすむ(霞) kasu-mu

かすか(微) kasu-ku

此等の對語中に見ゆるm形は、此名詞法の遺片なるべし。

三、動詞を造る接尾語

めく 四段活用の自動詞なり。

春めく、なまめく、時めく、色めく、おぼめく。

めかす めくの他動形にして亦四段活用なり。

うごめかす、時めかす、今めかす。

がる 四段活用なり。面白がる、樂しがる、哀れがる。

ぶ 上二段活用なり。古ぶ、里ぶ、鄙ぶ。

ぶる 四段活用なり。頗(少ぶる)、いなぶる、ひたぶる、

ちはやぶる。

此外黄ばむ塵ばむのはむ、共なふ幣(ぎ)なふ商なふのなふ、幸はふ味はふのはふ等あり、此等はいづれも、もとは獨立の動詞なるべきも、既に其原義失せて、たゞ接尾語としてのみ存在せり。

四、形容詞を造る接尾語

がまし をこがまし、他人がまし。

たし 聞たし、云たし、有たし、持たし。

らし 愛らし、男らし。

五、副詞を造る接尾語

ながら 「そのまゝ」の意にして、語原は「處」なり、豆爾

波からの條を見よ。

萩の露玉にぬかんと取ればけぬよし見む人は枝ながら見よ

此意義より轉じて「なれども」の意となる。

誰とてか荒れたる宿といひながら月より外の人をいべき

左の例に見ゆるながらは、以上の二意を兼ねたり。

櫻散る花の處は春ながら雪そふりつゝ消えがてにする

上記の如くながらは豆爾波のとからとの合したるものにして、何の處にての意なり、手つから、身つから、口つから、

語原

心つから等のつからは、これと同一の構造なり。

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつるふとみむ

ものから 前條のながらともものと合したるものにして、のとなとは同一綴頭音を有するがため、なの省かれたるなり、ものなれどもの意。

いつはりと思ふものから今更に誰が誠をか我は頼まむ

ほととぎすなが鳴く里のあまたあればなほうとまねぬ思ふものから
すがら 夜もすがら、 さ夜すがら 夢もすがら、 道すがら、 などあり。

行くすがら心も行かず別れ路はなほ古里のことぞかなしき

がてら がてはごと(如)かね(兼)と同根にして、らは接尾語なり、あゆひ抄曰くかては加ふる心、らは良家なり、里言か

のがてら
語原

たぐ(良家)とは、やすら、うすら、わひじら、などのらなり。

我宿の花見がてらに來る人は散りなん後ぞ戀しかるべき

古くはがてりともいへり、山邊の御井をみがてりなど、がてに 難ガの意なり。

愛世には門させりとも見えなくになどか我身の出でがてにする

からに 故コにの意なり、仁徳紀に因オカ己モテ物カ而ネ泣ナクなどあるより見れば、豆爾波のからより一轉せるものか、又思ふに古く故をかれと讀ませたるは、からにのからと相通ずるものにして、故の字音こと接尾語らとの結び合ひたるものなるべし、朝鮮語고故コにの義は此の如き組織なれば、上古漢學の傳來と共に、此語法をも彼に倣ひたるものか、尙研究すべし。

住の江の松を秋風吹くからに聲うちそふる沖つ白浪
置くからに千草の色になるものを白露とのみ人のいふらん
み

我門の板井の清水里遠み人し汲まねば水草生ひにけり
瀬を早み岩に塞かるゝ瀧川のわれても末にあはんとぞ思ふ

大槻氏は此等のみを、其意義上より副詞の接尾語とせられたれど、己れは此等のみを名詞法のみとし、其下には又はしての略せられたるものと見んと欲す、即ち「里遠み」は「里遠みに」珍らしみにや人の折るらん「などと同じ」瀬を早みは「瀬を早みして」安みして「甘みして」の類なり、當れりや。ことに「ごとし」(如、かぬ(兼)と同原の語なり。

雪ふれば木ごとくに花ぞ咲にけるいづれを梅とわきて折らまし

まに／＼「儘に儘に」を約めたる語、随意に「の義なり」。

山風の吹きのままに／＼紅葉ばはこのもかのもに散りぬべらなり
も、しきに花のいろ／＼匂ひつゝ、千とせの秋は君がまに／＼
ばかり 數あるものゝ中より、只此程といふ意なり。

原がりの語
いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし
がりの「の許へ」の義なり、所の字をあつ、萬葉に妹所妻所な
どありがりがりがは處の義(都)のこ、其處のこと同語にして、
りは接尾語なり、よりのり、からのらと同じ故に、其構造は
亘爾波のからと全く同一にして、只母音の差によりて、彼
は彼方より此方へ、此は此方より彼方へ向ふ、方向の異なるのみ。

がりの語原に關する説は予の私見なり、古人はこれをがりの約と説
單語論 第十二章 接頭語 接尾語

きぬ。

づゝ宛の字を當つ、一つ二つなど數ふるつを重用したるものか、少しづゝ「一つづゝ」など用ふ。
など日本紀に何を讀めり、何と轉じて何となり、そのん省かりてと濁れるものならん。月など眺む花など見る。

文章論

第一節 總論

文章とは聲音の一團體にして、常に一定の完備したる思想を代表するものをいふ、故に長きは數百音より、短きは一音に至るべく、かの應答の聲、驚嘆の叫も、亦文章たるを妨げず、要は自己の表はさんと欲する思想を、他人に傳ふるを得べくんば足れり。

然れども、普通文章と稱するものには、少くとも左の二者を備へざるべからず、主語、説明語これなり。

主語とは思想を構成せしむる主たる題目にして、其動作形態等を叙述するもの即ち思想たるに外ならず、主語は

名詞若しくは他の品詞を名詞として使用したるものにして、普通、文章中の初位を占む、水流る、月清しの水、月これなり。

説明語とは主語の動作・形態等を説明する語にして、動詞・形容詞等これに當り、普通、文中の最後に位す、前例中の流る、清しこれなり。

説明語に對する主語以外に、更らに其主語・説明語を統ぶる主語あり、これを總主といふ、水は溫度低し、月は光清しの月、水これなり、且爾波はの條を見よ。

説明語若し有對自動詞、若しくは單對他動詞、複對他動詞なるときは、標準の語又は目的の語なくんば、思想完備し難し、これがために用ふる語を客語と稱す、花野に咲く、犬

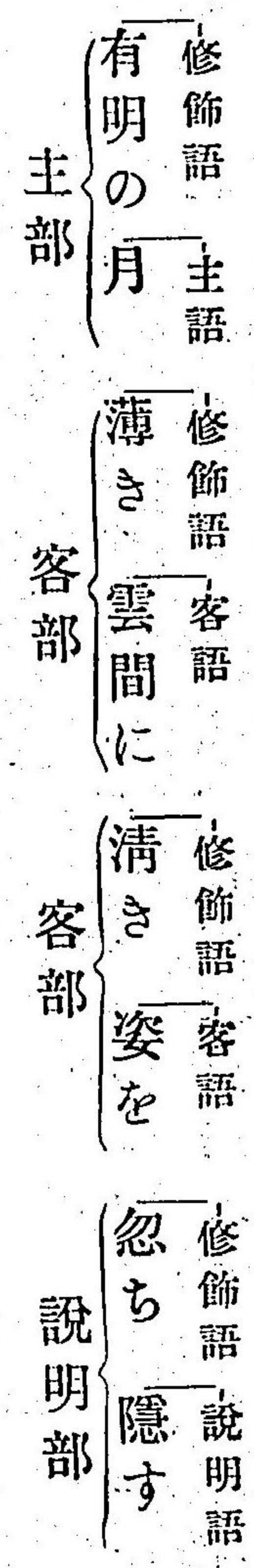
説明語

總主

客語

修飾語

人を噛む、友我に文を寄すの野に、人を、我に、文をこれなり。主語・説明語・客語は、更らに他の語句によりて、修飾せらるることあり、これ等の語句を修飾語と稱し、かく修飾せられたる主語・説明語・客語を、主部・説明部・客部といふ。主語・客語の修飾語は、活用言の連體法、若しくは名詞と且爾波とにより、説明語の修飾語は、副詞、若しくは活用言の副詞法によりてこれを表はす。



呼格の名詞、呼び掛けの名詞、感動詞、接續詞は前記の諸部以外に立つ。

主語・説明語・客語は時として省略せらるゝことあり、特に主語たる代名詞に多し。

第二節 枕詞

枕詞一に冠辭又發詞といふ、一種の修飾語にして、名詞動詞・形容詞・副詞等を修飾す、然れども古來よりの慣用によりて、某語の枕詞は何と定まりたれば、他の修飾語の如く、任意に使用すべからず、且つその總數も數百を超えず。枕詞は多く歌文の語調の足らざるところを満たすために用ひられ、隨て一語五音のもの多し、かくの如く今世に於ては専ら飭飾的のものなれども、其起原は寧ろ實用的にして、即ち同音異義の語を分たんがための方便に出で

枕詞

たるものゝ如し。

原枕詞の起

國語にはもとより同音異義の語少からず、これに漢語の混じられたれば、意義の混同を生ずる場合甚だ多し、例ば土も搥も音はつちなり、故に其中の一をあらがねのつちとして區別したるならん、これ恰も正を正月の正、庄を庄屋の庄として分つに異ならず、かくの如く枕詞は其初實用的に出で、後漸く飭飾的に變ぜしものと思はる。枕詞に諸種の別あれども、大要形容的・言掛的の二種に分る。

(一) 形容的枕詞とは、修飾せらるべき語の性状を表はすものをいふ。

伊須久波斯 鯨

八雲立 出雲

文章論 第二節 枕詞

蘆が散る

浪花

家つ鳥

かけ

打背貝

實無

天飛也

雁

石上

古

菅根の

長

(二)言掛的枕詞とは、修飾せらるべき語と枕詞とを、同音の語にて言ひ掛けたるものを謂ふ。

ともし火の 明石燈火

いそのかみ 降る(舊)

我妹子に 淡路(會)

奈麻餘美の 甲斐(貝)

あられふる 鹿島(かしまじ)

大江山 生野(行)

玉櫛笥 二人(蓋)

たらちめとのみいひて、母の義をなすが如く、下の語を省きて、枕詞のみを用ふるもあり、飛鳥春日の如く、下の語の音を枕詞に負はせて用ふるもあり。歌文に序詞といふものあり、其性質は枕詞と同じけれど、それ／＼作者の創意に出で、且其長短もかれの如く制限せられず

足引の山鳥の尾のまたり尾の長くし夜を獨りかも寐え
名にし負はひ逢阪山のさねかづら人に知られてくるよしもかな

第三節 複文

複文とは一文の説明語を中止法とするか、若しくはこれに且爾波を加へて、他の文の句となし、かくて二箇以上の

複文

文章を連ねて、一文となせるものをいふ。

きのふといひ今日と暮してあすか川流れて早き月日なりけり
櫻花今ぞさかりと人はいへど我はさぶしも君としあらねば

第四節 挿入文

一文の形を變ぜずして、これを他文中に加へ、その修飾語若くは客語とするものを挿入文といふ。玉の緒に二重にと、のふる豆爾波といふはこれなり。

里はあれて月やあらぬと恨みてもたれ淺芽生に衣うつらむ

東雲にあかぞ別れし袂をぞ露や分けしと人のとがむる

花をこそ人や折るととがめしか數ならぬ身をいかにかはせん

故郷に出でにし後は月影を昔も見きと思ひやらるゝ

第五節 倒置句

倒置句

主部初に來り、客部これに次ぎ、説明部最後に位するを普通の順序とす。然るに、特別に力を用ひていはんとする語句は、人の注意を促さんがため、以上の順序を破りて、これを先だゝしむることあり、今稱してこれを倒置句といふ。玉の緒に留りより上にかへる豆爾波といふはこれなり。

名にし負はひいさ言問はん都鳥我思ふ人はありやなしやと

時鳥なが鳴く里のあまたあれば猶うとまねぬ思ふものから

明ぬるか川瀬の霧のたえくをち方人の袖の見ゆるは

知るや君知らずは如何につらからんわがかくばかり思ふ心を

月見れば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にあらねど

而已ならず、豆爾波の如きも同様の理由に基きて、倒置せ

らるゝことあり猶掛結の條に詳論すべし。

亦打山暮越行而盧前乃角太河原爾獨可毛將宿
角障經石村毛不過泊瀬山何時毛將超夜者深去通都

第六節 言掛

言掛とは枕詞の條に述べたるが如く、同音異義の語を利
用して、一語を兩様に解せしめ、文の飭飾ともし、又其句調
をも整ふるものをいふ。

月は一つ影は二つ満つ三つ湖の夜四の車に月を乗せてうしとも思
はぬ鹽路かなや。

我庵は都の辰巳しかぞ住む世を宇治(憂山)と人はいふとも

思へども人目包みの高ければかは(川)と見ながらえこそ渡らぬ

風吹けば浪うつ岸の松なれや根音にあらはれてなきぬべらなり

久しくもなりにけるかな住の江の松待は苦しきものにぞありける

歌に物名を讀み込むも亦一種の言掛なり。

秋はさぬ今やまがきのさりざりす夜な〜鳴かん風の寒さに

面白さたまたぬ(春)の小雪哉

年も人も育つ初はむつき(晴月)かな

言掛の最も秀拔なるものを秀句といふ例へば

左(酒)

飲手

北窓(秋餅)

搦入らず

此種の言語上の戯は古くより行はれしものと見え、古事
記にも數多見えたり、其一二をいはず、垂仁天皇の條に到
山代國之相樂時取懸樹枝而欲死故號其地謂懸木今云相
樂又到弟國之時遂墮峻淵而死故號其地謂墮國今弟國也
又崇神天皇の條に故其軍悉破而逃散爾追迫其逃軍到久

須婆之度時皆被窻而屎出懸於禪故號其地謂屎禪今謂久須婆

其他竹取物語磯上中納言の條にあなかないなやのわざやといふより思ふに違ふことをかいなしといふなりとあるが如きも其一例なり。

これと同時に、同音異義の語は諸種の迷信を生ずる原因となり、香物三片(甲者身斬)を忌み、熨斗(手熨)樂音通ずを祝賀に用ふる等、其例多し、尙これが爲めに、言語の變遷を促がすことさへあり、梨(無と音通ず)を有の實といひ、葦(惡と音通ず)をよしといふが如し。

第七節 掛結

掛結

尋常文を結ぶには活用言の終止法を用ふれども、其上に來る且爾波の種類によりては、此結法を一變することあり、此等を稱して掛結といふ。

本居宣長翁の紐鏡には、三條の大綱に分ちて、右をは、も、徒の結、中をぞ、の、や、何の結、左をこそ、その結と定められたるを、大槻氏の文典には修正して、左の如くしたり。

- (一) 尋常の結法
- (二) ぞ、な、む、や、か、の結法
- (三) こそ、その結法

氏の説は載せて、其文典別記三二六節以下にあり、其大要に云く、終止法にて結ばるゝは、は、ものみに限らず、これはたゞ其代表に過ぎざれば特に其二三を擧げていはんよ

り、凡て文の終を終止法にて結ぶを、尋常の結法と稱するに如かず、又の係といふものゝ連體法にて結ばれたるは、其末を省略し餘情を含めたるものにて、例へば

時鳥深き峯より出にけり外山のすそに聲の落ち來るは

然らざるは終止法にて結ばれたり。

くれなるに霞の袖のなりてけり春の別の暮方の空

又何の係といふは、其下にかありてこれが係となれるにて、實は何には關係なし、故にかなくして連體法にて結ばれたるは、其省略せられたるにて、然らざるものは終止法にて結ばれたり。

夏草は茂りにけれど郭公などか我宿に一聲もせぬ

たらし姫神のみことの魚釣らすとみ立しせりし石を誰れ見き

尋常の結

故に、何を第二の結法より除き、さて別に連體にて結ぶるゝ、なんを加へ、ぞ、なん、や、かを第二の係としたるなりと、今凡てこれに従ふ。

第一 尋常の結法は終止法を用ふ。

有明のつれなく見えし別より曉ばかり憂きものはなし

人ごとを繁みこちたみ會はざりき心わること思ふな我背

足引の山時鳥のみならず大方鳥の聲も聞えず

野邊近く家居しせれば鶯のなくなる聲は朝なさな聞く

命令・禁止の意なる動詞は、係の有無を問はず、常に文を結ぶ。

すゞしさはいきの松原まさるともそふる扇の風な忘れそ

夏山に鳴く郭公心あらば物思ふ我に聲な聞かせそ

萩の露玉にぬかんし取れば消ぬよし見ん人は枝ながら見よ
ながむれば我山の端に雪まろし都の人よあはれとも見よ

第二 ぞ、なん、や、かの係は下を連體法にて結ぶ。

ぞの例

殘なく散るぞ目出度き櫻花ありて世の中はての憂ければ
櫻花とくちりぬともおもほへず人の心ぞ風も吹きあへぬ
北へ行く雁ぞなくなるつれてこし数はたらでぞかへるべらなる
さぞ、なぞもぞに準じて其下を結ぶ。

さりぐす秋のうければ我もさぞ長きよすがら鳴わかしつる
ことならば思はずとやは言ひはてぬなぞ世の中の玉禪なる

なむの例 は文に多くして歌に少し。

その人かたちよりはこゝろなんまさりたりける
さくら花山に咲くなん里にはまさとときくを見ぬがむびしさ

ぞの結

なむの結

やの結

やの例

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして
來んといひし程やすきぬる秋の野にたれ松蟲の聲のかなしき

かの例

花よりも人こそあだになりにつれ何れをさきに戀ひんとか見し
いもがりとさほの川邊を分けゆけばさよか更ぬる千鳥なくなり
いかゞはいかにかの略にして、かの結法に従ふ。
もの思ふといはぬばかりは忍ぶともいかにすべき袖のまつくを

第三 こそその結法は已然法を用ふ。

をみなへし吹すぎて來る秋風は目には見えぬど香こそしるけれ
戀すてふ我名はまだき立にけり人知れずこそ思ひそめしか
春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるゝ
寐ぬ夜こそ數つもありぬれ郭公きくほどもなき一聲により

こそその結

かの結

掛結の起原

掛結の起原の因は語句の倒置にあり

但し結びより次の句に言掛け、或は互爾波によりて次の文に繋がる、時は、上記の結法によらず。

戀ひ死なで心盡しに今までも頼むればこそいきの松原
珍しき春も明日とぞ聞ゆれば暮なん年をなごり惜まん

係結の事は大要かくの如しといへども、國語は何故かく三種の結法を備へたるか、係の互爾波のためにたい何となく結法の變ずるものか、そもくまた三種の結法の根底に於て異なる意義のあるものか、是等は皆研究を要する問題にして、而もいまだこれに論及したるものあるを聞かず、今暫く予が一家の私見を掲げて、世の定評を待つ。

一、や、かの掛結

掛結の原因は語句の倒置にあり。

まぬびなば我袖用て隠さんを焼けつゝ、かわらん(さ)着ずでましけり
さく花は千草ながらにあたなれど誰かは春を恨みはてたる(さ)

や、かの掛結の起原は、連體法の倒置にあり

大井川河邊の松にこと問はんかゝる御幸やありし(さ)昔も
諸共に鳴きて止めよきりくす秋の別はをしくやはあらぬ(さ)
かく下に來べき疑問の互爾波を、其疑問の意を強く表はさんがため、順序を顛倒して上に持ち來りたるもの、やがてや、かの係となれるなり。さてや、かの結を連體法とするは、連體法に未來の意あるによる、凡て疑問は未定不明のことを問ふなれば、意義上當然未來に屬す、さればや、かの結には多く未來の助動詞用ひらる。

年の内に春は來にけり一年を去年とやいはん今年とやいはん
こすやあらん(さ)やせんとのみ川岸のまつ心の思ひやらなん
君やこん我や行かん(さ)のいさよひに真木の板戸もさゝずねにけり
みよし野の吉野の瀧にうかひ出る沫をか玉のきゆと見つらん
かはづなく神なし川に影見えて今か咲らん山ぶきの花
抑予が連體法に未來の意ありと唱ふるは、日韓兩國語の比較より得たる結果にして、其詳細は今此に述ぶること能はずといへども、我國語の

みより論ずとも、亦これを證すること難からず、即ち未來に限りて用ふる疑問のかは常に連體法に接す。

あるかなきか (未來疑問)

ありやなしや (現在疑問)

又未來の助動詞有の複合したるゆりを除きては、連體法と終止法と同形なるをも思ふべし。

終止法 連體法 已然法

未來 けむ けむ けむ

推量 らむ らむ らむ

まし まし ましか

されば其語に生得未來の意あるもの限り、連體と終止との別なく、疑問のやかも混じて使用せらる。

夕されば思はしげき待つ人の來んや來じやの定なければ

其他の場合には、常にか(連體に接す)の方に、未來の意多し。

來やくと待つ夕暮と今はとて歸るあしたといづれまされる

ちる花もあはれと見ずやいそのかみふりはつるまで惜む心を

秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬか波のよするか

明ぬるか川瀬の霧のたえくにをち方人の袖の見ゆるは

而してかや倒置せられて係となるときは、其語勢強く隨て未來の意を

深むるが故に、何れも其下に來る動詞形容詞を連體法、即ち未來の形と

するなり。

世の中は何か常なる(飛鳥川昨日の淵ぞけふは瀬になる

鶯の昔を戀てさへづるは木つたふ花の色やあせたる(

來んといひし程や過ぬる(秋の野にたれ松蟲の聲の悲しき

二、ぞの掛結

その連體に於ては、
原語の語
にその語
原語の語
に於ては

ぞは萬葉にも其を當てたれば、語原は其なりと古くより唱へ來れども、予は從はず、萬葉に其を當てたるは借字にして、これを以て直ちに語原を説かんとするは早計ならずや。

予の臆説はぞを以てこその上略とするにあり、而してこそその原義は事又は物なるべし(韓語 事)は物又は事の意にして亦一種の係となる(と考ふ)即ちぞはもと事物の意を有する名詞にして、倒置せられて係とされるものなれば、もとは連體法の下に接したること無論なり。

きりくすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思は我ぞまされる(モヨ)
秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおとろかれぬ(モヨ)
ぬれつゝぞ強て折りつる(モヨ)年の内に春は幾日もあらしと思へば

三、こそその掛結

こそは是其なりとの説古くよりあれども、前に述べたる如く、予は其語原を物又は事と解かんと欲す。

こそその掛結の懸遷

石間ゆく水の白浪立かへりかくこそは見めあかずも有かな
大原やをしほの山もけふこそは神代のこともおもひいづらめ
おのづからさこそはあれとおもふまにまことに人とはずなりぬる
なきあとの面影をのみ身にそへてさこそは人の戀しかるらめ
此等のこそ、さこそは名詞を受くる互爾波はに接し、なほ幾分か原義を存したりと覺ゆ。
こそその掛も亦倒置より出でしものにして、ぞと同じく連體法にて結ぶを古體なりとすべきが如し。

萬葉 はちすば、かくこそある物
同 馬にこそふもだしかくもの

此等は恰もこそその意を二重に重ねたるものにして、思ふに所謂掛結びの初期は、かくありたらん即ち

- (一) はちすば、かくある物
- (二) はちすば、かくこそある物

- (三) はちすば、かくこそあるぞ
- (四) はちすば、かくこそあれ

大要かくの如き變遷を経て、初は物事の意なる名詞こそ變じて係となれるものなるべし、されば萬葉以往にこそその係を形容詞にて結べるは連體法の形なり。

わたのそこおきをふかめておふる藻のともいまこそ戀はすべなき
玉くしろまさぬる妹もあらばこそ夜の長きもうれしかるべき

なには人あし火たく屋のすしたれどおのが妻こそとこめづらしき
形容詞より推して考ふるに、動詞も亦こそその結はもと連體法にして、その已然法となれるは後の事ならん、但し其轉變の時代は詳ならず、チャムバレン氏は凡そ西暦七百年頃なりといはれたれど、如何にや。

以上は掛結に關する私見の大要なり、然れども、予自からもいまだ自己の説を以て満足するものにわらず、たゞ國語特有の語法ともいふべき掛結の起原につきて、いまだ論辯したる人なきをわかず思ふ心より、か

呼應

自他の呼應

くも解釋せば如何ならんと問ひ試むるまでの事なり、國學の諸大家幸に指教を吝むなかれ。

第八節 呼應

呼應とは語脈又は文脈或は調べともいひ、上下相應じて文を統一せしむることをいふ、これに種々の方法あり。
(一) 自他の呼應 一の文主に附屬する數多の動詞、又は對等の句に屬する各動詞は、文章の統一上、自他何れか一方

- | | | | | | | | | | | |
|--------|----|-----|----|---|----|-----|----|-----------|----|-----|
| (1) 功 | 自主 | 成り | 自動 | 名 | 自主 | 舉りて | 自動 | 身野に退く | 自動 | (一) |
| (2) 和議 | 自主 | 破れば | 自動 | 名 | 自主 | 舉りて | 自動 | (人)身を野に退く | 自動 | (二) |
| | | | | | | | | | | (三) |

文章論 第八節 呼應

文主 自動 文主 他動
和議 破れば (兩國) 戦争を 始めむ。

(四)

以上の四文いつれも悪しとはあらねども(一)(三)の如く
自他いつれかに整ふる方調宜し、此等を自他の呼應とい
ふ。

文主 他動 文主 自動
「忘れ」忘らる、身をば思はずちかひてし人の命の惜くもあるかな

此等の歌も「身はおもほへず」と自動に改めて、相應せしむ
る方よろし。

(二)能所の呼應 一文主に附屬する二箇以上の動詞は、能
相所相何れか一方に定めて、相呼應するを正しとす、但し
修飾句に屬する動詞は此限にあらず。

文主 所相 文主 所相
花雨に打たれ、風に散らさる

能所の呼
應

時の呼應

文主 能相 文主 所相
雲 月を 蔽ひ、花 風に散らさる
文主 能相
花 雨に打たれて 散る

修飾句

(三)時の呼應 断定の文(所謂直接法)に於て、原因結果の關
係を表はせる諸動詞は、現在・過去・未來の中何れか一方に
一致すべし、但し推定・想像の文に於ては然らず。

子 現在 幸なり (現在断定)
子 過去 ありし時は 幸なりき (過去断定)

子 未來 あらん は 幸ならん (未來断定)

且爾波ばどどもともによりて表はさるゝ、既定・未定の意
も亦これに準ず。

風 吹けば 既定 花散りぬ 過去 (過去断定)

風 吹かば 未定 花散らん 未定 (未來断定)

風 吹けば 既定 花散らん 未來 (未來推量)

故に左の歌の如きは、細書の如く改めて、時を整へざるべからず。

誰が方になびき果て、過去か富士の根の烟の末の見えずなるらん未來
未定おのづから思ひ出づともかひぞなき契りしまゝの心ならずば未定

中止法は凡て最終の動詞の時に従ふ。

月落ちツ、鳥鳴く。 (現在)

夜明けヌ、人起きぬ。 (過去)

反語の呼

功をなしサン、名を擧げん。 (未來)

(四) 反語の呼應 疑のや、か感動詞は、もの加はりたるやは、
かは、やもかも前後の語句と照應して、反語の意をなすもの
を、反語の呼應といふ。

(一) やの例

夜やくらき道やまどへるほとゝぎす我やどをしも過がてになく(疑問)
ちる花もわはれと見ずやいその上ふりはつるまでをしむ心を
心をぞわりなき物と思ひぬる見ぬものからや戀しかるべき (反語)
春の夜の夢の内にも思ひさや君なき宿を行て見んとは

(二) やはの例

世の中は昔よりやはうかりけん我身ひとつのためになれるか(疑問)
わすられぬ人の中には忘れぬをまつらん人の中にまつやは
時しもわれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを(反語)

散る花のなくにしとまらる物ならばわれ鶯におとらましやは

(三) やもの例

こゝにして家やもいつくまら雲のたなびく山をこえてきにけり(疑問)
山科の音羽のたきの音にだに人の知るべくわが戀めやも (反語)

(四) かの例

あすか川ゆきゝの岡の秋萩はけふふる雨にちりか過なん (疑問)
春雨のふるはなみだかさくら花ちるををしまぬ人しなれば
散る花を何にか怨みん世の中にわが身もともにあらんものかは(反語)
浮世をは背かばけふも背きなん明日もありとは頼むべき身か

(五) かはの例

いかならんいはほの中にすまばかはよのうき事の聞えこざらん(疑問)
くればまたわがやどりかはたび人のかち野の原の萩の下露
さく花は千草ながらにわだなれど誰かは春を恨みはてたる (反語)

聲絶えず鳴けや鶯一年に再とだに來べき春かは

(六) かももの例

かへり來て見んと思ひしわがやどの秋萩すゝき散にけんかも(疑問)
たちばなの下ふく風のかぐはしきつくはの山を戀ずわらめかも(反語)

左記の副詞はいづれも其下に來べき語の種類一定せり、
故に今暫くこれと呼應の中に數へて、左にこれを述べべし。

をさく 下に打消の意の語を要求す「大方専ら」の意なり。

あめやかなる今宵の雨に殿上にもをさく人少くな
にて「大宮の御もとにもをさく」まうで給はず「京より
來る人もをさく聞えず」

よもよによにも「恐らく何すまじ」の意なり、下に打消のじを要求す。

誰もよもまだ聞そめじ鶯の君にのみこそ落し始むれ
夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢阪の關はゆるさじ
なき名のみ立田の山の麓にはよにもあらしの風もふかなん

いさ多くは下に知らずといふ語を要求す、稀にはなきもあり「さればどうあるか」の意なり。

人はいさ心は知らず古郷は花ぞ昔の香に匂ひける
犬上のとこの山なるいさや川いさと答へよ我名もらすな

えは下に打消の語、又は反語を要求す。

津の國の浪花わたりにつくる田はあしかなへかとえこそ見分かぬ
惜むともかたしやわかれ心なる涙をだにもえやはといひる

さら／＼に下に打消禁止反語を要求す。

竹の葉にあられふる夜はさら／＼にひとりいぬべき心地こそせぬ
みまさかや久米のさら山さら／＼に我名は立てど萬代までに

ゆめゆめ／＼努力勤の字を當つかりそめにも「の意なり、下は禁止打消の語にて受く、但し歌には此語の位置を換へて、最後に置きたるもの多し。」

吾妹子をはやみ濱風やまとなる我待つ椿ふかさるなゆめ
戀しくはまたにを思へ紫の根ずりの衣色に出なゆめ
新玉の年の經ぬれば今しはとゆめよ我せ子我名告らすな

たとひ下に未來の意の語を置く。

たとひ暫しは別るゝとも待とし聞かば今歸り來ん

あにの下には必ず反語來る。

價なき寶といふとも一つきの濁れる酒にあにまさらめや

夜光る玉といふとも酒飲みて心をやるにあにしかめやも

あには何の略(な)ぜを(あ)ぜ(な)どを(あ)どともいへばなりといふ説あり、或は然らん、予は前章禁止の副詞の處に述べたる如く、あには勿(な)否(な)無(な)何(な)不(な)等(な)と同根の語なりと考ふ。けだし、下に疑問・未來の語を要求す、此語けだしくともなれば、もとは形容詞の如く活きしものか。

古に戀ふらん鳥はほととぎす蓋しや鳴きし吾戀ふること

蓋しくも人の中言さけるかも

もしも亦下に未來・疑問の語を要求す、此語ももしくはともなれば、もとは活用言なるべし。

もしもやと會ひ見んことを頼まずはかくふる程にまづぞけなまし
思ひ出で、もしも尋ぬる人もあらばありとないひそ定めなき世に

此他過去・未來の意を表す副詞の下には、亦過去・未來の動詞を置くなど、意義上より正に然るべきものは、今擧げず。いはく(日)申さく等の語の下には、更に同一動詞曰ふ、申す等を反覆して用ふること古法なり、例へば

女答へていはくこれは蓬萊の山なりと答ふ

これ等をも呼應といはゞいふべし、然れども、これは下に動詞なくては文をなさざるなり、く形は活用言の副詞法又名詞法にして、即ち

女答へて「これは蓬萊の山なり」といはくを答ふ

副詞法

女「これは蓬萊の山なり」といはく答ふ

此二者いづれにても、下に動詞なくば、文を完備せざるな

り、此考も亦予の私見なり、當れりや。

第九節 略語

略語とは文辭を簡潔にし、語調を流暢ならしめんがため、
文意の明瞭を缺かざる限り、語句を省略することをいふ、
歌は語句に限あれば、殊にこの事多し。

(君今日來ずは明日は雪とぞ降なまし消えずはありとも花と見ましや

またにこそ人の心もうつろふ(モノ)を色に見せたる山櫻かな

久方の光のどけき春の日に(ナド)まづ心なく花の散るらん

風吹けば峯にわかるゝ白雲の(如ク)たえてつれなき君が心か

春のきるかすみの衣ぬきを薄み(シテ)山風にこそ亂るべらなれ

戀しさに悲しきことの添ぬれば物はいはれで涙のみこそ(流ルレ)

秋の田のかり穂の庭のとまを荒み我衣手は露にぬれつゝ(夜ヲアカス)

略語

解剖

わたつみと(ナリテ)あれにし床を今更に拂はし袖や泡と(ナリテ)うきなん
又本歌ありて、其内の一句を引用したるものもあり。

梅の花誰が袖ふれし句ぞと、春や昔の月に問はしや

強てなほ袖ぬらせとや藤の花、春はいくかの雨にさくらん

「春や昔の春はいくか」には次の本歌あり

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして

ぬれつゝぞ強てをりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

此等も亦一種の略語なり。

第十節 解剖

單語論・文章論に於て説きたることを、實地に就きて練習
せんがため、文章を分解して、各個の單語に歸着せしめ、其
性質、相互の關係等を説明するを、文の解剖といふ、例へば

吹く風をなきて恨みよ鶯はわれやは花に手だにふれたる

修飾語 吹く 自動詞加行四段連體法

客語 風 名詞

を 第一種互爾波恨みよの目的を示す

修飾語 鳴き 自動詞加行四段連用法

て 第三種互爾波動詞鳴くと恨むとを續く

説明語 恨みよ 他動詞麻行上二段命令法

主語 鶯 名詞

は 第二種互爾波名詞鶯を指定す

主語 我 人代名詞第一人稱

や 第二種疑問の互爾波觸れたるの係

は 感動詞互爾波やに結びて反語となる

客部

説明部

主部

主部

客語 花 名詞

に 第一種互爾波他動詞觸るの標準を示す

客語 手 名詞

だに 第二種互爾波

觸れ 複對他動詞良行下二段連用法

たる 過去助動詞已然法やの結

説明語

客部

客部

説明部

日本文法論終

明治三十六年十二月七日印刷
明治三十六年十二月十日發行

日本文法論
定價金七拾五錢

著者 金澤庄三郎

發行者兼 金港堂書籍株式會社
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

右社長

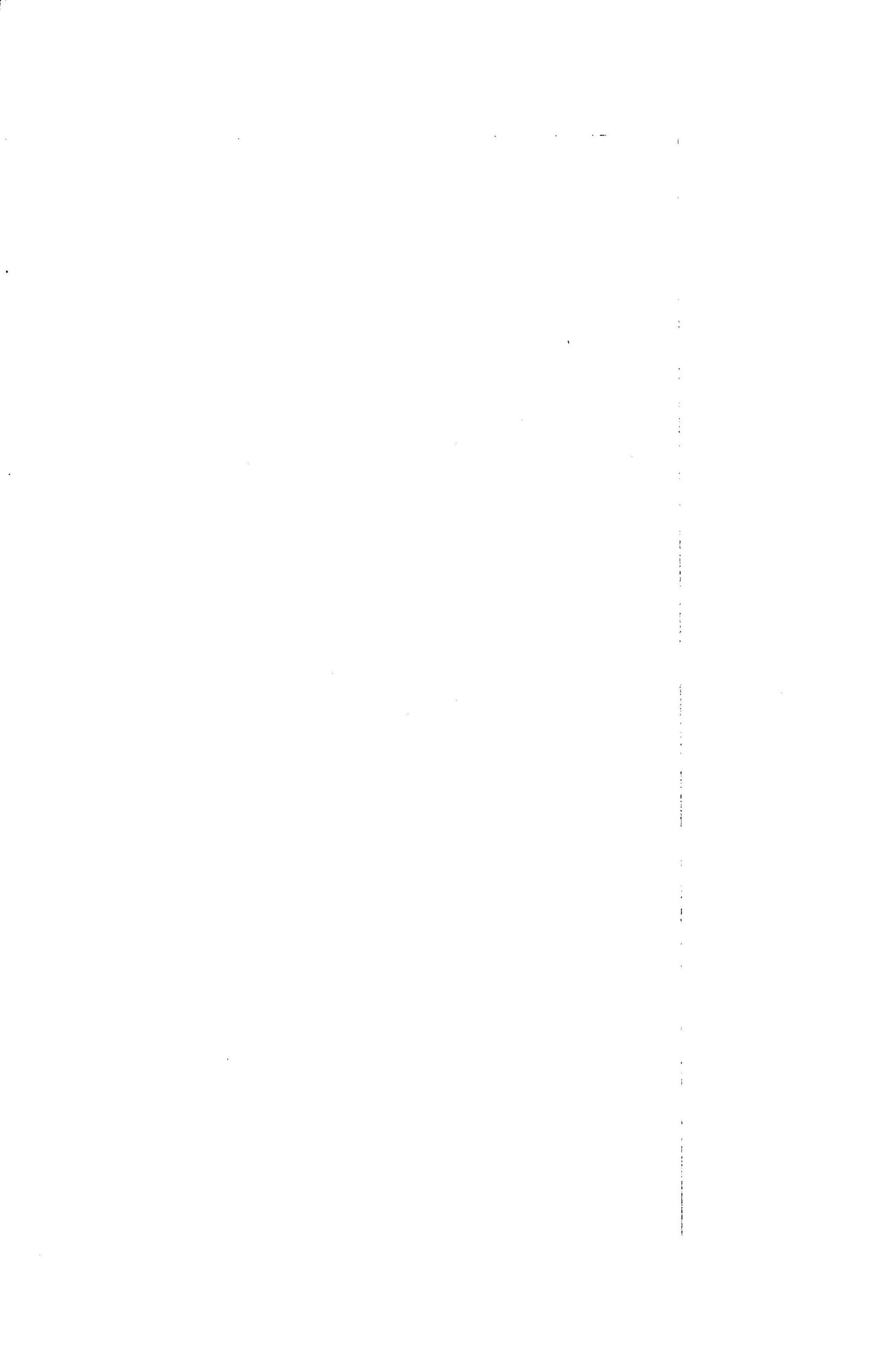
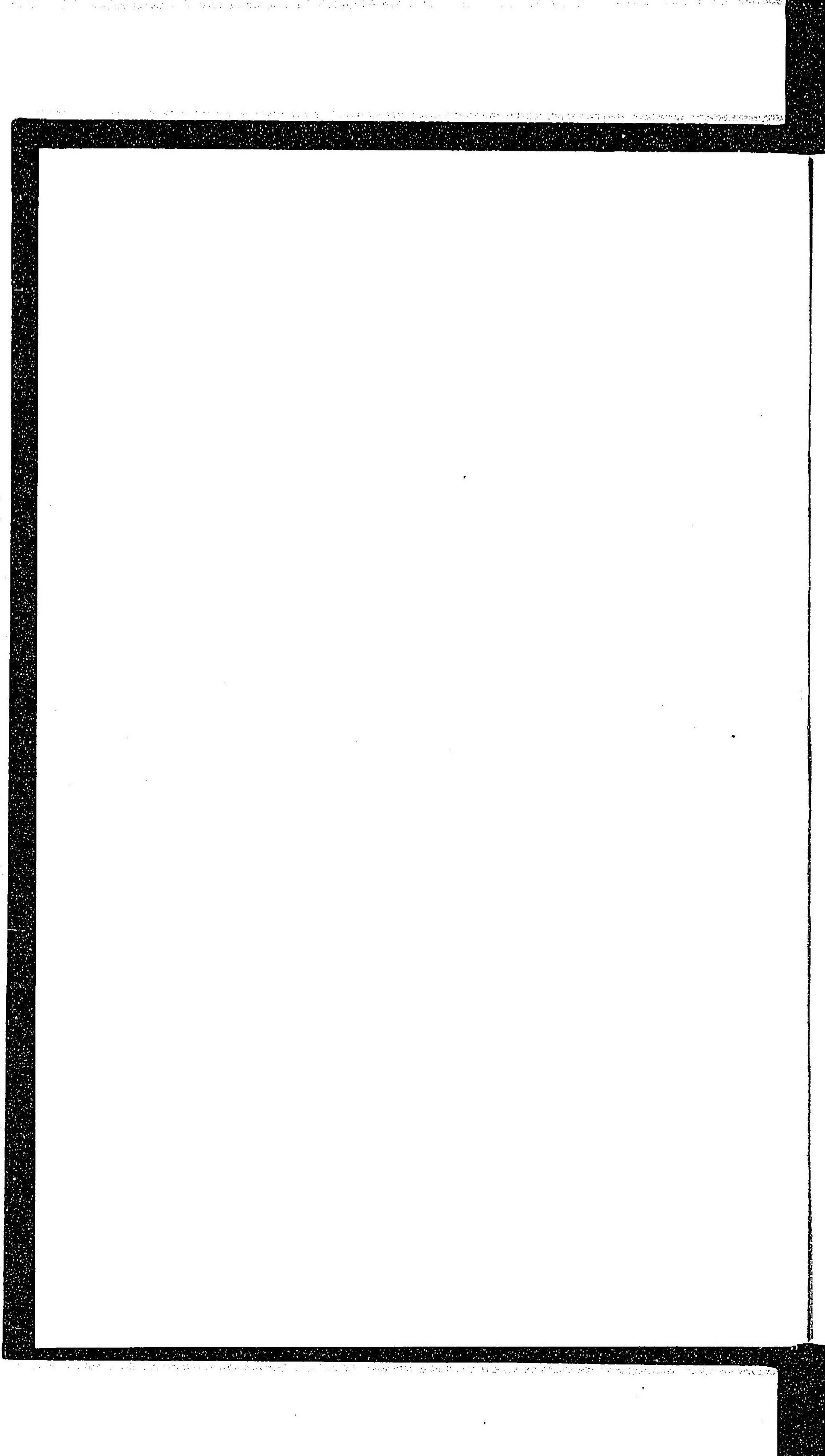
代表者 原亮一郎
東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

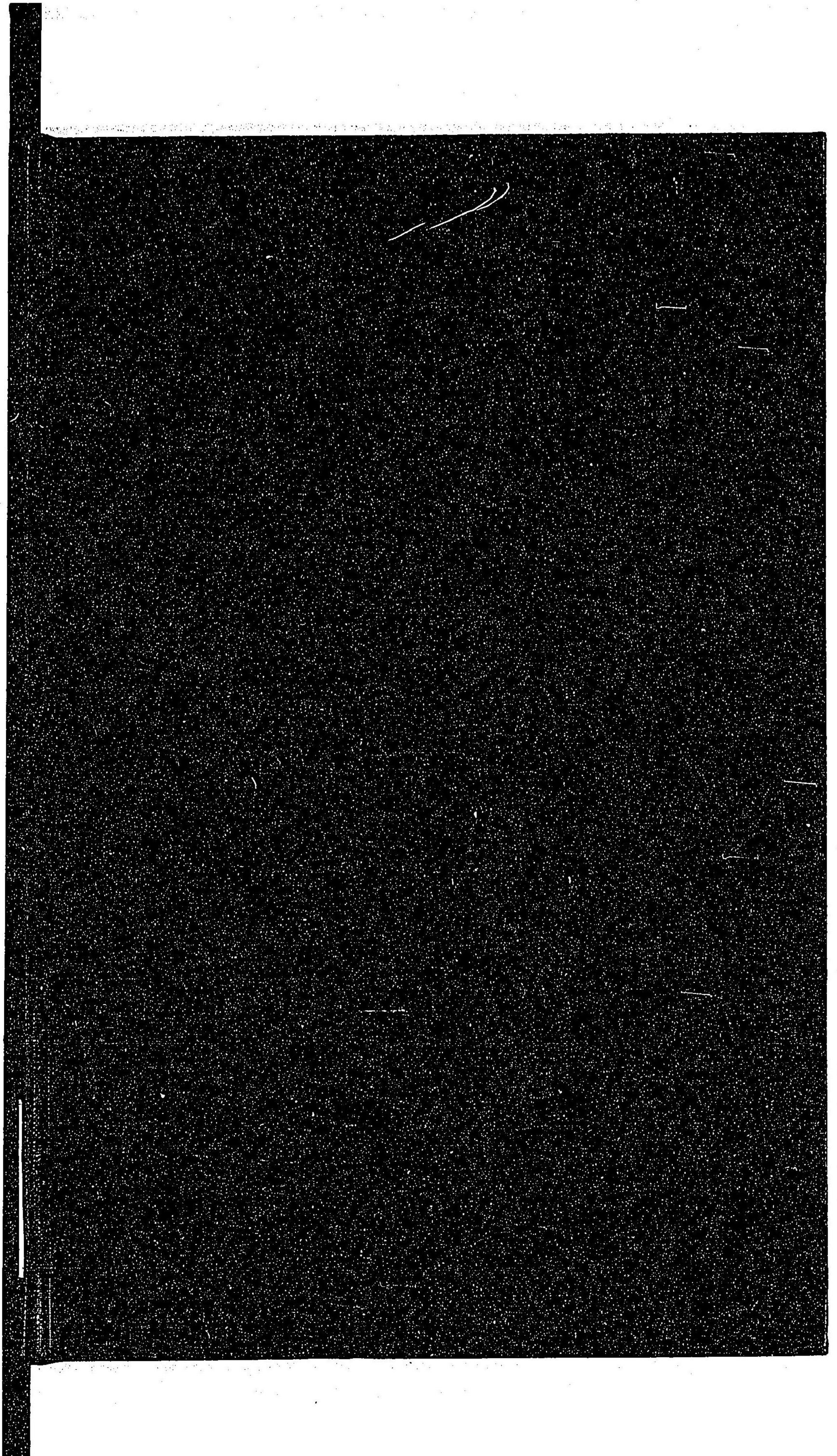
印刷所 帝國印刷株式會社
東京市京橋區築地三丁目十五番地

賣捌所 各府縣特約賣捌所

不許複製







815
Ka373n2

078617-000-1

815-Ka373n2

日本文法論

金沢 庄三郎/著

M36.12

DAC-2349



